

# センタージャーナル

〒460-0016  
名古屋市中区橋二丁目8番55号  
TEL (052) 323-3686  
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



「あの時」と「今」を繋ぐ原爆ドームの前では、多くの人々が手を合わせていた。

(写真の無断転用はご遠慮ください)

立つ！  
いのちの大地に  
聞く！  
いのちの叫びを

真実の学びから、  
今を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

## もくじ

- ・ 聖典研修 第6回  
親鸞聖人の御生涯に聞く ②・③  
吉水入室
- ・ 大谷派の近現代史  
講義抄録 ④・⑤  
「沖縄の現状に学ぶ」
- ・ 聖典研修 第7回  
親鸞聖人の御生涯に聞く ⑥・⑦  
念仏に関する二つの主張
- ・ INFORMATION ⑧

◆イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

## 静寂と沈黙の祈り

戦後七十四年が経過しようとしているなか、過日、教務所・教化センターの職員研修において広島を訪れた。平和記念公園の敷地内に平成十四年八月に開館した国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、追悼空間スロープを時計の針と逆回りに下って行くと「あの時」へ時間を遡る。十二本の柱に支えられた十四万枚のタイルにより爆心地である島病院から見た被爆後の街並みが表現されていた。この十二本の柱は、被爆直後の「ヒロシマ」と私たちが生きている「今」を繋ぐ時を象徴しているのだと思う。

その祈念館に参拝する前、平和記念資料館において「被爆体験伝承講話」を伺った。語り部が、自身の「おばあちゃん」から聞いた言葉はたったの三つ。一つ目は「また出てきた」と、爆

風で粉々になったガラスの破片が何十年と経って体の奥深くから出て来た時の言葉。「えい！」と言って凄く苛立っていたそうだ。二つ目は、小学校の宿題で被爆者の体験談を聞いた時の「ピカッ」と光った後、家のあらゆるものが私にのしかかってきた。その時に光輝く仏さまを見た。それで私は助かった」という言葉。しかしその後、口をつぐんで何も喋らなくなった。三つ目は、高校生の時に聞いた「うわあ」という祖母の叫び声。八月六日の平和式典の様子がテレビから映し出されており、明治生まれの祖母が、ぼろぼろ涙を流し泣き崩れていた。その時、人前

で決して涙を見せない気丈な祖母が喋らなかつたのは、あの恐ろしい体験がよみがえってくるので喋れなかつたのだと思ひ知つたという。国立祈念館には、これらの話すことのできない、これからも語られることのない話が十一万件の音声データとしてストックされている。

語り部は、そこに横たわる問題の暗部だけを語り、断罪することもなく、表裏としてある逞しき、豊かな時をも語る。標敵をつくり、聴者に感情移入させたり思考停止させたりすることもしない。決して結論を急がず、聞く人に委ねる。その姿に「当事者の話を聞くことで何が分かる」と想定し、聞きたいことだけを予想しながら聞く、我が身の落とし穴があったと改めて気づかされた。

聞くとは、自身の理解の彼方にあるものに気づかされ、絶句することから始まるのだろう。大切なのは、封じられた沈黙が、打ち捨てられた空白が、そこにあるということなのだ。

理不尽に踏みこじられた数多のいのち。聞くことはその無念の跡を訪ね歩き、その沈黙に耳を傾け、静寂の中にさやかにある深い祈りに耳を澄まさねばならぬのではないか。被爆者、被差別者、ハンセン病者等、あまた多くのいのちに憶いを重ねつつ。

(主幹 荒山 淳)

## 聖典研修

2018年5月21日

## 親鸞聖人の御生涯に聞く

## 第六回 吉水入室

講師 東館 紹見氏 (大谷大学教授)



## 吉水入室の記録の意義

皆と共に仏道を歩もうとする大乘の仏教は、自利利他を大切にしますが、ことに浄土門においては、それは阿弥陀仏から回向されたところのお念仏の中にすべ

ておさまるものと思います。つまり自身自身が念仏の教えをいただき、それが生活の要に据えられていくことが自利。そしてそのことを皆と一緒に確かめ、阿陀

陀仏の本願のはたらきを共に味わっていただくことがすなわち利他といえるでしょう。このように、それまでの求道の歩み

をうけて、念仏を人生の要となる教えとしてただかれた歲月こそ、親鸞聖人が二十九歳から三十五歳まで過ごした吉水

教団での生活だったと思います。ご承知の通り、聖人は吉水にある法然上人の禪房に百日間通った後に入室されますが、その出来事を『教行信証』後序

において、  
建仁辛の酉の曆、雑行を棄てて本願  
に帰す。

〔聖典〕三九九頁

とおっしゃっています。自らの救済のための交換条件のような形で教えを選ぶのではなく、阿弥陀仏が与えてくださった念仏のはたらきに頭が下がり、そういう生き方の中に皆と出あっていく。聖人に

おける仏教の受け止め方、生き方がそのように定まったということ、それはつまり、いわゆる自分に都合の良い「ご利益」を求める信仰とは全く異なる歩みを示してくださっているのだと思います。

また、親鸞聖人の伴侶である恵信尼様は、聖人の葬儀を済ませた末娘の覚信尼様からの手紙に対する返事の中で、次のように書かれています。

後世の助からんずる縁にあいまいら  
せんと、たずねまいらせて、法然上人  
ににあいまいらせて、又、六角堂に  
百日こもらせ給いて候いけるように、  
又、百か日、降るにも照るにも、い  
かなる大事にも、参りてありしに、た  
だ、後世の事は、善き人にも悪しき  
にも、同じように、生死出ずべきみ  
ちをば、ただ一筋に仰せられ候いし  
をうけ給わりさだめて候いしかば

〔聖典〕六一六頁〜六一七頁

煩惱を具足した身のままで、人々と共に迷いの生を超えていく。そのような「生死出ずべきみち」が、法然上人との出会いを通じた阿弥陀仏の本願との出あいと帰依により、確かなものとなった。恵信尼様は覚信尼様に「あなたの父の人生とはこのようであった。これは皆にも伝えていくべき事柄」として語っておられるのです。

家族の出来事は私的なものでありますが、恵信尼様はその内容を公開する意義を感じておられたのでしよう。つまり、人々が阿弥陀仏の本願に出あっていく中、聖人の吉水入室という個人的な出来事が、私的なこととして完結することなく、公的な領きをもって語られる内容となっていくのです。

## 法然上人の歩み

法然上人は美作国（現岡山県）において、親鸞聖人より四十年早く生まれました。父は押領使として地域の治安維持に当たっていた有力武士、漆間時国です。上人が九歳の時に夜襲に遭い亡くなりま

すが、臨終の際、「敵を恨むな。遺恨を結べば、その仇が継がれていく」と上人にいわれたそうです。この話は、『法然上人行状絵図』（勅修御伝）をはじめとする上人の伝記に出てきます。父の死をそのように受け止めたのが法然上人であるということはいわれないでしょう。

この父の死をきっかけに、法然上人は地元のお寺で出家し、その才を見出され比叡山に送られます。そして学の深い様々な学僧方に、教えを受けていかれました。『法然上人行状絵図』には、上人が、いずれば天台宗を背負って立つ大学匠になるよう期待されたと出てきますし、この他の様々な史料にも、上人に対する尊敬を含んだ表現が見られます。このことを考慮すれば、伝記の記述が事実無根だとは思えませんし、少なくとも上人が学僧として一番上の地位に就かれると皆が

期待していたといえましよう。

しかし、法然上人は十八歳の時に隱遁の志を起こして黒谷の叡空の庵に入り、一切経（大藏経）を深く学ぶ道を選ばれました。黒谷は比叡山から離れた地域であり、比叡山の別所ともいわれます。隱遁を選んだ背景には、自分や父だけではなく、父の仇も共に救われていく道求めたということがあったのではないでしょう。か。学僧として上の位を目指すならば、比叡山の経営や政治に重きを置かざるを得ません。そのように歩むことで、皆と共に救われる道から離れてしまうという疑問を抱かれたと思うのです。

さて、そのように黒谷で隱遁生活を送る中、法然上人は『往生要集』を通して念仏に出あわれますが、称名念仏を浅い初心者のための修行法の一つとする黒谷の伝統的な解釈では疑問が解消されませんでした。それ故、二十四歳の時、念仏を説いた釈尊にその真意をたずねるために嵯峨の清凉寺を訪れたり、善導大師の教学の研究が盛んであった南都に赴いて勉強なさったりしました。

その後、黒谷に戻り、皆と共に歩むことのできる「生死出ずべき道」を確かめようと一切経全てを通読されること五回、上人四十三歳の時、善導大師『觀經疏』の一文と出あわれます。

一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥、時節の久近を問わず、念念に捨てざるをば、これを「正定の業」と名づく、かの仏願に順ずるがゆえに。

〔聖典〕二二七頁

「かの仏願に順ずるがゆえに」という部分は本当に大切でしょう。皆と共に救われていく念仏とは、私が努力して為すのではなく、阿弥陀仏が発してくださった共生きんという願いに、ただ頭が下がるといふ道なのだと思えてくださっています。この善導大師のお言葉を本当にいただくことにより、法然上人は回心されたのです。

### 吉水に集う人々

法然上人は、自身がいただいた念仏を普段の生活の中で生きる人たちと共に確かめたいと思われたのでしょう。親鸞聖人に先立って比叡山を出られ、最初は西山という所に行き、その後、より平安京に近い東山の吉水に移られました。東山の地域に青蓮院の關係の所領があったことを考慮しますと、後に天台座主となった慈円（および周辺の者）の協力があつた可能性も考えられます。民衆に念仏を広めることは、比叡山においても大事なことだったので。

では吉水の教団はどのようなあり方だったのか。『法然上人行状絵図』には、座敷で話をしてる僧侶や多くの民衆の姿が描かれており、様々な人が自由に出入りできる場所であったことが窺えます。

この様子を示すものとして、様々な質問に上人が答える『百四十五箇条問答』という問答集を見ますと、「念仏できなるときは、誰かに頼んで念仏してもらえばよいか？」という質問に「それはしな

くても良いでしょう」と答えたり、「酒を飲むことは罪ですか?」「できれば飲まない方が良くもありません。しかし、これもこの世のならないでしょう」、「父母より先に死ぬのは罪だという人もいますか?」「臨終の前後を決められないのが穢土のならないです」など、人々が日常生活における問いを率直に上人に尋ね、上人もこれに率直に、時にはユーモアを交えながら応えていたことが窺えます。多くの民衆が吉水に集った背景には、自分の思いや疑問に寄り添い、苦しみを受け止めてくださる上人のお人柄も関係していたのではないかと思います。

また『十二問答』という問答集を見ますと、「本願を頼みとして生きていますが、毎日の生活はどのような心持で過ごしたいのか」という問いに、上人は「念仏が申されやすい仕方です。申すのがよいのです」と答えておられます。そして「結婚せずに生きることで念仏が申されにくいようなら、結婚なされば良いでしょう。またその逆のようならば結婚なされないで念仏を申すのもよろしいでしょう」ともおっしゃっています。要するに、阿弥陀仏のいのちと光に遇うことが一番大切なのだと教えてくださっているのです。

この時代、吉水以外にも、人々に分かりやすく教えを説く場所があったと思います。造像起塔・多聞多見・持戒持律できな人でも救われると説かれていたことでしょうか。しかしそれは多くの場合、「お前たちのようなものでも救われる」という説き方だったのではないでしょう

か。一方で、法然上人は「如何なる人間も、阿弥陀仏の前では闇を抱えた存在である。そこに本当に頭が下がるといふことを通して、日常の生活の中で平等に歩んでいくことができる」という説き方をしておられます。様々な人々がその教えを求めて、吉水に赴いたのではないのでしょうか。これらとの出あいを願う人々が集まる吉水教団における六年間の生活の中、親鸞聖人は法然上人を含めた本願に多くの方と出あうことを通して、阿弥陀の本願に出あうていかれたのだと思えます。

### 念仏を確かめることのできる場

法然上人は御流罪になる前、念仏者の行き過ぎた行いを戒める『七箇条制誡』を出されます。そこには、上人自身を含む百九十人分の署名が見られます。主だった弟子だけでもそれほどの人数がいたということであり、そこに先ほどのような質問をした一般の方々などを含めれば、本当にたくさんの方がいらつしたのです。泊まり込みの人も、通いの人も、皆が吉水で生活しながら聞法をしておられたのです。

このような吉水教団の生活を、多くの方が支えようとしたのだと思います。ただ、経済的に主として支えたのは比叡山に違いありません。法然上人だけでなく、吉水にいた弟子の多くは比叡山に籍を置く僧侶ですし、従来通りの念仏の説き方をするならば、民衆を撰め取る裾野を広げるといってみれば「経営に資す

る」という意味でも、比叡山にとってプラスになるのです。

しかし、上人は如何なる立場であろうと、阿弥陀仏の本願に頭が下がった時には平等に救われていくという説き方をされます。それは比叡山の体制にとつて無視できるものではなく、上人は何度か注意を受けます。また、吉水教団の弟子においても、経験を積み重ねるうちに「昨日入ってきた者と自分は一緒なのか」という疑問や不満が生じ、比叡山などで説かれる従来解釈で念仏をいただく方も出てくるのです。

先の問答からも窺えるように、法然上人は厳しいお方ですが、とにかく人々の様々な気持ちを受け止め、寄り添っていかれました。そうした姿勢は、そのまま阿弥陀仏から賜ったお念仏をいただく姿といえるでしょう。そしてそのことにより、教団内における念仏への理解に異なりなどが生じたのも事実でしょう。阿弥陀仏の本願に出あうことを通して、皆と共に歩む道をいただいた親鸞聖人。また、何故念仏が大事なのかという問いより、念仏を申すこと自体に主眼を置いた方々など、いただき方の違いにより議論が生じたことは『御伝鈔』の「信行両座」の段などにも見られます。

しかし、上人はそういった事柄も全て受け止めながら、人々が念仏の道を行んでいくよう教えを説き続けたのです。その教えを聞いた一人一人が念仏を確かめることができるよう開かれた場が、吉水教団だったと思います。

大谷派の  
近現代史

講義抄録

## 「沖縄の現状に学ぶ」

一級土木施工管理技士・沖縄県大宜味村在住

奥間 政則 氏



二〇一八年十月二十三日、教化センターは第30回平和展の開催に先立ち、平和展公開学習会を開催した。講師の奥間政則氏は、三十年以上に亘り土木工事に携わってきた専門家。その知識と経験から、現在、名護市辺野古で進められている米軍新基地建設工事における技術的な問題点を指摘するとともに、「国策による差別の構図」という重要な視座を示してくださった。ここに、当日の講義内容を抄録する。

(\*掲載情報は、二〇一八年十月二十三日現在のもの)

## 問いかけではなく、訴えたい

沖縄から来ました。問いかけるのではなく、訴えに来たのです。沖縄に軍事基地が造られていく現状を変えるために。先の沖縄県知事選は歴史的な大勝でした。実は我々もメディアも、このような結果になるとは思っていませんでした。かつて私も基地問題には無関心でしたが、人は変わるといふことを伝えたいと思います。

一九九七年に辺野古の米軍基地建設の住民投票がありました。この時、会社の命令で「賛成」の幟(のぼり)を持たされて投票場に駆り出されました。しかし、開票と同時に反対派の当選確実が報じられた時、一般の人と、自分たち作業服の人が抱き合って喜んだのです。「土建屋は全員、基地を容認し加担している」という敵視した見方はしないでください。ただ、我々も苦しい立場です。これは原発と同じですよ。「仕事だから仕方ない」「子どもを食わせていくためには、やらざるをえないだろう」と。このように仕向けたのは国の責任です。基地が造られれば、もう

終わります。また、宮古、石垣、与那国などに自衛隊の基地が次々と配備されています。辺野古には色々な人が集まりますが、自衛隊の問題に関してはやはり消極的なのか、運動がとて小小さくなっています。住民同士が争い、宮古の市長も容認している。そういう苦しい中で闘っている人がいます。自分は土木屋として、色々な技術を提案しながら辺野古や宮古の問題に関わっています。

## 戦争とハンセン病

私は両親が元ハンセン病患者であった事を知っていました。差別を知らなかった。向き合ってこなかったのです。五十年経って、父ちゃんが書いた手記で差別を初めて知りました。

戦前、国はハンセン病患者に対して隔離政策をとりました。医学界の権威が隔離を唱えましたが、小笠原登先生(大谷派圓周寺)だけは、「ハンセン病は遺伝しないし、感染力も弱い。免疫力の低下によって発症する」と言ってきました。国

策による強制隔離や、誤った認識による断種や墮胎。それらを知った時、「基地が造られる沖縄の現状と、隔離政策という国策は同じ構図だ」と気づき、新聞や雑誌などの取材を受ける際にそう伝えていきます。しかし、周囲から公表しないで欲しいと言われていました。自分が名前を出したことで、親戚も地域社会から排除されるのです。「ハンセン病は治る病気だから差別はない」と言われていますが、現実には死んでも差別されるのです。

ハンセン病の国立療養所は、全国に十四施設あります。平成三十年十月時点の入所者数は一二六九人です。遺伝すると言われていたので、患者同士が結婚した際、断種や墮胎を強要しました。しかし、私が生まれた奄美大島の和光園は唯一、それを強いなかった施設です。そのことすら、二十歳の頃に知りました。自分なりに「戦争で疎開して、たまたまそこで生まれたのかな」と、ずっと思っていました。でも事実は違います。

父ちゃんは、過去についてあまり話すことがありませんでしたが、二〇一三年頃から書き始めた手記があります。「戦に追われた少年の記憶」というタイトルの手記には、沖縄戦の体験や、戦後にハンセン病を発症したこと、そして基地問題を訴えていたことなどが書かれています。沖縄で行われた地上戦から逃げようと、体力も低下して痩せ細り、免疫力が低下したため発症しました。だから、沖縄の人は戦後発症がとて多いのです。戦争とハンセン病は繋がるのです。

政府の杜撰(ずさん)さでストップ

実は、この米軍基地建設工事は杜撰な

計画ゆえに二〇一六年に一度ストップしています。同年二月一日の産経新聞によると、埋め立てに詳しい国土交通省の技官が工事の進め方や、土砂や資材の調達方法を見直すために防衛省に向し、護岸の着工が「ずれ込む」と書いてあります。要するに、防衛局というのは全くの素人なのです。国交省であれば徹底的に調査をした上で対応しますが、防衛局はそれをしなかった。だから、国交省からプロ中のプロが来て工事の技術的な問題を把握し、三月四日に政府が辺野古工事を止めました。ですから、政治的な意味合いによって止まったのではないのです。

## 元名護市長の抵抗

元名護市長の稲嶺進さんが市長の権限で止めていた工事計画が三つあります。一つは、土砂を運ぶために辺野古ダムの上には橋を架ける計画。二つめは、ダムの上路である美謝川を埋め立ててダム出口から直接海へ出そうとした計画。そして三つめは、辺野古工事の資材置き場として辺野古漁港を埋め立てようと防衛局が考えた計画です。この三つを市長の権限で止めていたというのは、とても大きかったのです。

## サンゴの問題

二〇一八年四月十八日時点の埋め立て予定地内に、オキナワハマサンゴという希少なサンゴや準絶滅危惧種のヒメサンゴがいます。これらのサンゴを移植する許可権者は沖縄県です。防衛局は「移植許可を出せ」と言っていますが、出さなかった。埋め立てて湾を閉め切ってしまうと潮の流れが無くなり、サンゴが死

滅してしまふ。だから防衛局はサンゴの移植なしには閉め切ることができなかったのです。

ところが、二〇一八年七月十三日に沖縄県の水産課が、その許可を出してしまつた。沖縄県知事だった翁長雄志さんは「あらゆる手段を行使しても辺野古を止める」と何度も言っていました。担当部署が従わなかつたのです。

実は一度、沖縄県が許可を出したことがあります。その時、東京経済大学の大久保奈弥先生がサンゴの専門学者の立場から水産課に助言し、県の許可を取り下げさせたことがあります。そもそも沖縄県は、サンゴの移植事業を行つていますが、九割方は失敗しているのが現状です。

この他にも漁業権の問題もありますが、名護市の漁業組合がそれを放棄して、工事が進められてしまいました。ですので、新しく漁業組合を作る申請を出しているのですが、水産課は許可してくれません。漁業組合として立ち上げれば、漁業権が発生し、工事を止められる可能性があります。

### ジュゴンにも影響

防止膜という、濁りを防ぐカーテンのようなものがあります。一番下に、重石代わりに鎖を入れて、これが海底に届いて、工事の際の濁りが外洋に出ないようになっています。しかし、この鎖が海底を削っている。それが大きな問題です。防衛局が沖縄県に出した報告書には、「辺野古基地全面海域のリーフ内に防止膜を設置しない」と書いてあります。その理由は「防止膜の設置により海藻藻場が損傷を受ける可能性が高い」からです。その

海藻は絶滅危惧種のジュゴンの餌です。海藻などに影響する恐れを考慮して設置しないというのが当初の方針でしたが、設置したのです。

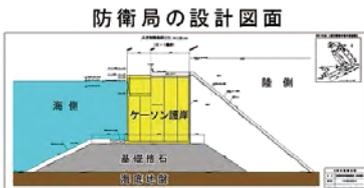
また、この濁りが発生した原因に杜撰さがあります。山から削り取つた採石には埃などが付着しているので、九十秒以上シャワーを浴びせて洗浄する必要があります。その工程を省いている。だから、濁りが発生した。そして、発生した濁りがサンゴに影響を及ぼさないように防止膜を張つた。そうしたら海底を削り、ジュゴンの餌場を壊す。このように全てが後手なのです。

### 軟弱地盤の問題

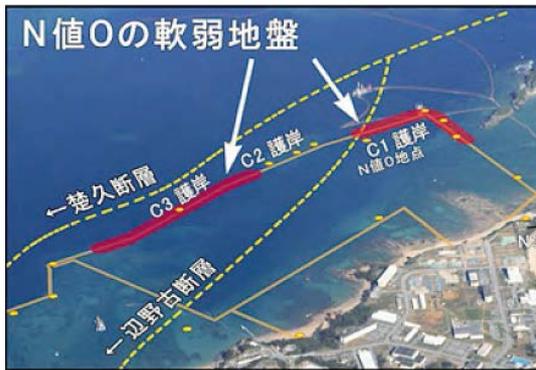
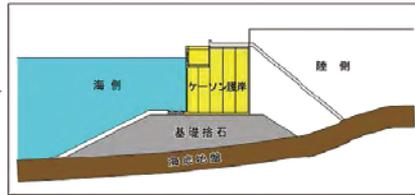
軟弱地盤の問題は、二年前に防衛局の図面を見た時に気付きました。図面の黄色い部分はケーソンと云って、高さが二十メートル、奥行きが二十メートル、長さが五十メートルある巨大なコンクリートの箱のようなものです。この図面では、海底地盤がフラットに描かれてあります。しかし、実際は、沖に行けば行くほど傾斜して深くなります。捨石というの、海底地盤の上に大きい石をそのまま落として積み上げますが、コンクリートが一体化するわけではなくて、ただ置いておくだけです。地震が起これば崩れる可能性があると、自分は技術屋の直感でわかりました。そして、防衛局の報告書の中に、ボーリング柱状図というも

のがあります。ボーリングというの、構造物を造るために、その地盤が安定しているかどうかを事前に調べる地質調査です。ここで注目すべきが「N値」という数値です。ゼロから五十まであります。ゼロはヘドロ状態で、五十は固い岩盤だと思ってください。ケーソン護岸付近の「N値」の結果を見ると、二から二十三の軟弱な地盤ということがわかります。

二〇一八年の二月頃に出てきた防衛局の資料を見ると、「N値ゼロ」という結果も出ていました。しかも、「N値ゼロ」の層の厚さは四十メートルもあります。地



実際の地盤ラインを入れた図



盤工学が専門の日本大学の鎌尾彰司准教授は「マヨネーズのような軟弱な地盤だ」と説明しています。かつて、羽田空港の建設工事で軟弱地盤を克服した時は、二十メートルのヘドロ状態でした。技術的には四十メートルの地盤改良は可能ですが、膨大なお金と時間が必要です。

### 活断層の問題

また、活断層の問題も明らかになりました。琉球大の加藤祐三先生が二〇〇七年九月二十四日に「辺野古の海域には活断層があるのではないかと指摘しました。その後、新潟大学の立石雅昭名誉教授も活断層の存在を指摘し、調査団を結成して地質調査をすることになりました。二〇一八年の十二月七日から九日に琉球大学で開かれる日本科学者会議の中で、地盤問題について発表することになっており、そのための調査をやります。徳島県が南海トラフなどの地震を想定して「活断層の上に建物を建ててはいけない」という条例を制定したように、もし活断層ということが証明されれば、辺野古にも「条例請求をしよう」という動きがあります。条例が制定されれば、基地建設を止められます。

私が人前で話をするのは、自分の情報を法学、地質学、土木工学、物理学などの学者に提供することによって、理詰めである防衛局に対して理詰めで闘えるからです。民意で色々な行動をするのも我々の重要な闘いですが、ただ闇雲に「反対」と言うのではなく、頭脳的に闘える。知識を持つていけば、闘う姿勢は変わってきます。辺野古はまだまだ闘えます。

## 聖典研修

2018年9月10日

## 親鸞聖人の御生涯に聞く

## 第七回 念仏に関する二つの主張

講師 東館 紹見氏 (大谷大学教授)



## 弾圧の本当の原因とは

今日は、承元の法難において念仏の教えが弾圧された背景と、弾圧に対する従来の主な説の問題点を、最近の研究をふまえて確認していきたいと思えます。

弾圧の原因として、「専修念仏が盛んになり、法然上人の吉水教団が大規模なものとなったが故に、南都の興福寺などが妬んで訴えを起こした」という怨恨説があります。しかし当時、比叡山をはじめとする既成の仏教教団は宗教勢力として衰退しておらず、莊園領主として世俗的にも大きな力を持っていました。ですから、「妬んで」という説は考えにくいと私は思います。

また、「僧俗・性別を問わず、人々が共に集うというあり方などが風紀を乱すと判断され、弾圧につながった」という見解もあります。この事柄について、承元の法難を命じた後鳥羽上皇の女房数名が、上皇の熊野詣の留守中に安楽房遵西などを招いて往生礼讃を行い、そのまま御所に宿泊させたという、『愚管抄』などに書かれたスキャンダルが有名です。それで上皇が怒り、法難が引き起こされたという風紀紊乱説です。しかし、これは弾圧の表面上の理由にはなるかもしれませんが、その本質ではないでしょう。

このこと一つが、死罪や流罪、教団の解散という大規模な弾圧がなされる理由になるとは考えにくいのです。

『興福寺奏状』が国に提出されるなどの、法難に至るまでの一連の動きを考えるならば、吉水教団への対策として、既成仏教教団が国を巻き込む必要性があったということでしょう。そして、そのような動きに出た既成仏教教団の判断に、最終的には国も同意したのです。ですから、法難の根本の原因は、あくまで思想的な問題として見ていくべきだと考えます。

## 既成仏教の悪人正機

例えば、最近の研究では、親鸞聖人より以前の寺社権門(既成仏教)において、すでに「悪人正機」が説かれていたと指摘されています。しかしそれは、歴史学を専門とされる平雅行先生が「階層的悪人正機説」と表現しておられるように、結局のところ、「身分階層の違いを認めただ上で、一番低い悪人のようなものでも救われる」という説き方のものでした。

つまり、「末法である現在においては、機根(能力・財力・地位など)に応じた善根を積みなさい。出家者は学問・修行して、裕福な者は高額の寄進をして、それらができない者は、悪人でも救ってく

ださるといふ阿弥陀仏の名号を称えるくらいのことはいしなさい」と、機根を根拠に善人と悪人とを分けたうえで、それぞれの立場に応じた形での「平等」な往生成仏を説いたのです。

これにより、社会的に底辺といわれる身分の人にまで仏教信仰の裾野が延ばされたのですが、同時に、当時の支配体制の裾野をも延ばすという役割を果たしました。支配者に対しては抵抗を示す者にも、「仏さまの教えならば」と、善人・悪人という区分に矛盾しない身分階層を受け入れさせていくのです。これが当時の寺社権門が説く「悪人正機」であり、『歎異抄』において、

世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや。  
 (『聖典』六二七頁)

といわれるものです。

一方、法然上人や親鸞聖人がいわれたことは、そうではありません。罪を犯さざるを得ないのが私たちであり、そのことを自覚した名のが「悪人」あるいは「愚者」という言い方となるのです。つまり「悪人」という概念自体が当時の寺社権門とは異なっていたということであり、同じ称名念仏でも全く違う理解が並列して存在していたのです。

## 天台本覚思想の危険性

もう一つ、当時の寺社権門が持つ問題の背景として、天台宗で発達した天台本覚思想が挙げられます。「本覚」という思想自体は仏教的なものです。これが

当時の頭密仏教によって用いられた結果、差別や支配と結びついて社会に説かれたという側面も存在すると私は思います。

例えば、本覚思想では「生死即涅槃」という言い方がされます。「苦悩に満ちた現実が、そのままですとりの境地である」ということです。『天台法華宗牛頭法門要纂』に、

一切諸仏は、生死を離れずしてしかも生死を離れ、涅槃を取らずしてしかも涅槃を得、(中略)汝、よくこれを観じて、生死を恐れざれ。生死は本楽なり。人迷いて苦と観るのみ。

と述べられるように、「現実の様々な問題は、仏さまから見れば実は問題ではない。迷った者が誤って苦悩と観ているだけなのだ」と人々に説いていくのです。他にも、「此土即極楽」(「苦悩に満ちた現実が、そのまま浄土」)、「煩惱即菩提」(「苦悩の根本である自己中心の心のある方が、そのままですとりの境地」という言い方がされます)。

これらの思想をそのまま当時の社会体制にあてはめると、「差別は差別のまま本覚は『平等』となり、人々の矛盾を感じる気持ちや疑問などを全て摘み取るはたらきをするようにもなります。また「煩惱がそのままですとりの境地」となれば、出家者が修行する必要もなくなってしまうのです。

もちろん、多くの仏教者はそれらを目的として本覚思想の教えを説いたわけではなくありません。現実の過酷な支配のもとで苦しみ続ける人々における問題、そし

て皆と共に成仏する道を目指して一生懸命修行しながらも、一向にさとることができないという修行者における問題。それら乗り越える一つの応えとして、真剣に模索された道の一つが本覚思想ともいえるでしょう。しかしそれは、寺社権門が当時の支配体制と一体化していたが故に、現実の差別や苦悩に対して何の問題も提起せず、かえって現実の矛盾をそのまま肯定したり、僧侶の墮落した生活を正当化したりしていく。このような危険性を含みながら、当時の社会に展開していったのです。

この本覚思想は戦前の頃から研究され、一九六〇年代から七〇年代には田村芳朗という先生が、鎌倉期成立の仏教の前提として注目すべき思想だと提言されました。「正信偈」に「生死即涅槃」という言葉があることから、親鸞聖人に影響を与えたことは窺えますし、本覚思想を立場とした者と同様に、現実社会の苦しみや、修行してもさとることができないという問題に聖人が直面したであろうことを考慮すれば、大変重要な指摘だと思えます。しかし近年では、先ほど述べたような本覚思想の危険性、そして聖人の問題の乗り越え方に根本的な違いがあることに注意が払われています。

親鸞聖人は、仏さまからの回向という立場から真の一乗の道をただかれ、本覚思想と訣別していかれました。ですから、「正信偈」の「生死即涅槃」とは、「生死の苦海の中でのみ功德の宝海に出あえる」ということでしょう。娑婆世界とは浄土の光をいただく場所であると聖人は

おっしゃいますが、娑婆がそのままで浄土だとはいわれません。このように同じ表現を用いながらも、思想的な立場は異なるという点を明確にしておく必要があると考えます。

### 支配体制と矛盾していく教え

法然上人・親鸞聖人が説かれた教えは、「末法である現在において、あらゆる人々は機根の劣った「悪人」という他はない。だから善根を積むことができる善人とされる人も、何の善根を積むことができない悪人とされる人も、平等である」という立場のものであります。自分自身を「阿弥陀仏の本願に背いている悪人」として自覚する。この自覚とは阿弥陀の光に照らされて、自己中心性が破られていくということです。そしてその光に出あうための行為（＝回向の大道である称名念仏）を大切に憶持することによってのみ、全ての人に平等な救済がもたらされるというものです。ですから、悪人でも救われるのではなく、悪人と自覚した人こそが救済をいただく教えだと思えます。さらにいえば「そのような悪人にはなれないけれども、教えは私の前に説かれ続けている」という自覚が救いへの入り口であると思われまます。

このように、法然上人・親鸞聖人がおっしゃることは、人間の自己中心的なものさしの延長線上に置かれた、あるいはそれとの境目がはっきりしない行や善根に対する評価を根本から転換させることになるのです。たくさん念仏を称えたか

ら、修行できるから、多くの寄進をできるから、という機根によって往生が決まるのではありません。阿弥陀如来による真の救済を、称名念仏一つという形で表しているのです。ですから、こういう説き方は、一般的な意味での善人・悪人の秩序を認めた上に成り立っていた当時の平等観への批判につながるのです。

当時、宗教的に優れた人と考えられていたのは、修行や学問ができる人、多くの寄進をできる人ですから、自ずと世俗的に地位の高い人が当てはまります。そうなる、仏教の救済と、現実の身分や階層とは、何ら矛盾することが無いのです。

しかし、法然上人や親鸞聖人のように「皆が平等に悪人であり、仏さまに頭の下がった者こそが救われる」となりますと、宗教的な価値観と世俗的な価値観（身分）とは全く違うということが示されるのです。そして、その考えが社会に展開していけば、地位の高い人が持つ宗教的優位は意味を失い、「多額の寄進や修行をして積み上げてきた善根は何だったのか」と、その根底が覆されることになるのです。さらには、本覚思想などを背景として人々が受け入れてきた現実の支配可能性もあるのです。

### 仏法を私有化しているのは誰か？

人々を抑圧しながらも、それを抑圧と感じさせないところに成り立っていたのが当時の支配です。その際に、本覚思想

を立場とした仏教が体制側に利用されてきたということがあります。また出家者の側も、自己中心なものさしで仏教を測り、都合の良いように自分達の側に教えを引き寄せてしまったのです。どうしてもそのように振る舞ってしまう人間の問題性を、決して他人事ではない、我が事として目を背けなかったのが法然上人であり、親鸞聖人ではないでしょうか。

そのような問題を明確にしていくような、阿弥陀仏による平等な救いを説くという姿勢は、従来の出家者や世俗的権力者からしてみれば、その立場を脅かすものだったのではないかと考えられます。吉水教団に集う人の数が問題だったのではなく、根本的に相容れない思想的立場の違いが存在したというべきだと思います。

以上のことを考えますと、承元の法難とは、怨恨や風紀紊乱を理由とした弾圧ではなく、顕密仏教の仏教観（ひんみつ）・念仏観と、専修念仏の仏教観・念仏観との根本的な違いが本因だと考えられます。仏法を勉強しますと、自分は仏法の側に立っているように思ってしまう。そのような私有化を許さないのが、念仏の教えです。

ですから、弾圧の問題は私たちにとても決して他人事ではありません。真宗教団に所属していると「我々の宗祖を悪い者が弾圧した。自分達こそ真の仏教者だ」などと考えてしまいがちですが、それはまさに自分の都合で仏法を引き寄せ私有化しているにすぎません。そのような自己中心なものさしへの問い直しが、この法難からいただかれまます。

## 第30回平和展 報告

## 「仏教の社会活動 - アジア太平洋戦争と大谷派 -」

期間: 2019年3月16日(土)~24日(日) 会場: 名古屋教務所1階 議事堂

今回で30回目という節目を迎えた平和展。この30年の歩みは、過去の歴史を客観的に検証することだけに留まらず、過去の歴史を通して「今の時代に生きる私たちは大丈夫なのか」と問われ続けてきた歩みでもあった。歴史を見つめることは、その歴史から地続きで繋がっている現代を見つめることであり、現代という時代を生きる私たち一人一人の在り方を見つめることでもある。その視点を、平和展では30年に亘って大事にしてきた。

近年の平和展では「仏教の社会活動」というテーマのもと、十五年戦争と呼ばれる時代を前期「満洲事変」、中期「日中戦争」、後期「アジア太平洋戦争」の三期に分け、かつて大谷派が「社会活動」の名のもとに積極的に戦争加担した歴史を見つめてきた。そこから見えてきたのは、十五年戦争が始まる以前から、自ら教えを捻じ曲げ、積極的に国家に加担し、戦争する社会へと参画していった大谷派の姿だった。

大谷派の戦争協力は、今回取り上げた「アジア太平洋戦争」期に頂点を迎えた。当初は勝ち戦のようにも見えたこの戦争も、徐々に戦況が悪化し、敗戦が見え隠れするようになる。その中でもなお「金属類回収令」に伴う寺院の梵鐘供出や、宗門をあげて赤字覚悟で取り組んだ「建艦翼賛運動」などの戦争協力を推進

した大谷派の姿からは、仏教の姿は見えてこない。より正確に言うならば、それは仏教の姿のように見せかけた別の「なにか」の姿だったのではないだろうか。

仏教の社会への参画や活動というテーマは、今も昔も変わらない大事なテーマである。しかし、私自身は本当に仏教を中心軸に据えて社会活動をしているのか。時代や社会や私の都合に合わせて、仏教を利用してないだろうか。仏教を「私のもの」として利用することが大きな過ちの始まりとなること、そして、過去の歴史の事実が今の時代を生きる私に「お前は大丈夫なのか」と問いかけていることを、改めて実感した九日間であった。

(職員 寺西 賢静<sup>てらにし けんじょう</sup>)

空襲で被弾し、穴が空いた喚鐘を見つめる観覧者

## INFORMATION

## 教化センター日報

## ■2018年12月~2019年2月

12月4日 研究業務「自死者追悼法要」後援  
10日 教化センター運営会議  
13日~18日 名古屋別院報恩講  
19日 伝道スタッフ養成講座③後援

27日 研究業務「平和展」学習会  
1月16日 研究業務「平和展」構成会議  
21日 研修業務「聖典研修⑨」(東館紹見氏)  
23日 教務所・教化センター合同報恩講  
28日 図書整理(~2月8日)  
2月18日 職員研修事前学習会  
21日 研究業務「平和展」学習会  
26日 教務所・教化センター職員研修(~27日)

## 2019年度真宗門徒講座

## お釈迦さまに生きる道をたずねよう — 私にまでとどいた仏の願い —

今年度は、教化センター主幹と、研究生OBを中心としたスタッフとともに、お釈迦さまの生涯とその教えを学びます。有縁の方お誘い合わせの上、ご参加ください。

講師：荒山 淳 (教化センター主幹)  
真宗門徒講座スタッフ(研究生OB など)

会場：名古屋教務所1階 議事堂

時間：午後2時~4時

参加費：1回300円(シュルタカード適用講座)

主催：真宗大谷派名古屋別院 教化伝道部

▶問合せ TEL 052-331-9578

FAX 052-321-3184

## 年間予定(全10回)

第1回	4月10日(水)	はじめに
第2回	5月8日(水)	誕生
第3回	6月4日(火)	出家
第4回	7月8日(月)	求道
第5回	9月11日(水)	成道
第6回	10月11日(金)	仏弟子
第7回	11月12日(火)	三帰依

2020年	1月24日(金)	入滅
第8回	2月25日(火)	前生譚(ジャータカ)
第9回	2月25日(火)	前生譚(ジャータカ)
第10回	3月25日(水)	お釈迦さまの願い

## 《雑感》

研修旅行の事前学習会で、『この世界の片隅に』という映画を観た。噂には、素晴らしい映画であると聞いていたが、これほどまでに素晴らしい映画であるとは想像していなかった。研修旅行の目的地は、映画『この世界の片隅に』の舞台である広島と呉であった。広島では、原爆ドームを見学した後、平和記念公園の中にある平和記念資料館へ行った。うまく表現できないが、この地から感じ取るものは非常に大きかった。呉では、呉市海事歴史科学館、海上自衛隊呉史料館、呉市美術館、呉市図書館へ行った。戦前も戦後も、呉は、海と共に生きてきた町であることを感じ取れた。研修旅行の事後の復習として、再度、『この世界の片隅に』を鑑賞したい。

(IH)

## ■教化センター

〈開館〉月~金曜日 10:00~21:00  
(土曜日・日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間

~お気軽にご来館ください~

イラストカッター集

寺報やチラシなどにお使いください。

兵戈無用



國豊民安



國邑丘聚



佛所遊履



- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などもお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。  
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。